

第二・五・八・十一の四セッションは自由討論で、前述の話題について、それぞれ話題提供者の中山茂・吉田忠・大塚恭男・村上陽一郎の各氏から問題点が述べられ、それを中心にして出席者全員から活潑な意見が交換された。その他のセッションはいずれも二つの発表で構成され、先ず発表者が論文の要点を述べ、それに對して予め指定された討論者が意見を提出し、発表者がそれに答えたのちに、一般の参加者も含めて質疑応答がなされた。発表一題については一時間が当てられ、発表者の説明は五分程度にすることになってしたが、通訳の問題（日本語または中国語、一部英語で発表され、それぞれ中国語または日本語に訳された）などもあつて二十分或いは三分に達することもあつた。質疑応答も盛んで、座長は一時間以内に納めるのに苦慮し、そのために十一月三日の夜、医学と天文学の二グループに分れて、積み残した話題を中心にして自由討論が行なわれた。両グループとも二十人程度が参加し、約二時間にわたつて討議がなされた。

第一・三・四・六の四セッションは天文と曆法が中心であつた。これはこの二つの事項が中国歴代王朝の重要な関心事であつたという特殊事情から、とくに多くの科学史上の問題を含んでいるからである。医学に関係のあつたのは第七・八・九・十の四セッションで、それぞれの座長と発表者、表題、討論者は左記の通りであつた。

第七セッション（座長・杉立義一）馬堪温「隋唐医学の主な成果と特質」（討論者・宮下三郎）赤堀昭「傷寒論の歴史」（石田秀実）

第八セッション（座長・酒井シヅ）

第九セッション（座長・フオルテ）潘吉星「日中医学交流史の中の周岐来」（山本徳子）ウンシユルト「革命を行う科学とパラダイム共存科学」（伊東俊太郎）

第十セッション（座長・里深文彦）セビン「古代から清朝までの科学と医学」（中山茂）何丙郁「最近中国に於ける科学史研究の動向と展望」（坂出祥伸）

なお革命を行う科学とは訳の都合上そうなつてしまつたのであつて、パラダイム共存に對して、それを許さない、つまり前代の説を否定してしまふ科学の意味である。

最初の日の十一月一日の夜には会館内で簡素ではあるが素晴らしい雰囲気のリセプションが開催され、十一月五日には外国人招聘者全員が参加して、色つき始めた高雄へのコンGRES・ツァーが実施された。

第七回静岡岡県医の史跡探訪会

舟木茂夫

昭和六十二年九月二十七日（日）開催

行事内容

第一部 浜松医大図書館・館藏品見学会

第二部 浜松市を中心とした医の史跡めぐり

第三部 懇親会

支部報告

日本医史学会北陸支部近況報告

(支部長) 北陸医史学同好会々長加藤豊明

(連絡場所) 〒九二〇 福井市大願寺三―四―一〇 福井県医師会館内

北陸医史学同好会 電話(〇七七六) 二四―〇三八七

但し、会長宅は左記の通りです。

〒九二三 石川県金沢市野町四―一―二〇 加藤豊明

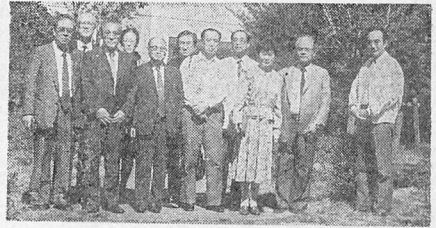
電話(〇七六二) 四一―二四〇八

(入会方法) 当会の名称は北陸医史学同好会と称し、北陸における医史学を愛好する者が相互に連携を計り、お互に研鑽を重ねることにより、医史学の発展に寄与することを目的としています。従いまして、当会はこの目的に賛同し、医史学に関心を有する人は会員として歓迎します。会費は年額、各自金四千円です。

現在の会員数は、福井県二十八名、石川県三十七名、富山県二十名、その他六名、計九十一名です。

(機関誌) 前記の当会の目的を達成するため、毎年北陸三県を持ち廻りで講演会や研究発表会を開催し、これらの事業を集録して機関誌『北陸医史』を発行しています。

(今年度事業報告) 当会の役員は会長一名と北陸三県から夫々選出された幹事若干名(現在は三県から各県夫々二名宛の幹事が選出され計六名)です。この幹事会の決議によりまして、今年度は



静岡県医史学懇話会では毎秋恒例の行事として、標記の件を東中西の三ブロック持ちまわりの形で開催しているが、今回は西部ブロックの当番で浜松医大の御協力を仰ぐことができ、主題を明治初期の浜松県立病院とその附属医学校および西遠医会関係のものに置いて行うことができた。

参加者は浜松医大構内で撮影した記念写真に見られるように十一名で、浜松医大との接渉開始に遅れて十分な予告期間がとれなかったことなど反省点もあったが、県史の編さんで御多忙中の岩崎鐵志先生が東京から矢部一郎先生を御勧誘下さった上に、案内役から解説役までも引受けて下さったおかげで、これまでになく密度の高い盛り上った会を催すことができた。

なお、この回を以って三巡目に入ったわけであるが、静岡県医史学懇話会が順調な活動を続けて来られたのは、土屋重朗会長の実績が認められて、県医師会の正式な分科会として発足して助成金まで頂いていることに負うものである。